

21世紀は子どもの世紀になれるのでしょうか？

脇 口 宏 (高知大学医学部小児思春期医学教室教授)

1. はじめに

「どこの世界に子を愛さない親がいるだろうか?」, という質問に対して, 50年前であれば, 「親が子を愛するのは当たり前である」, とほとんどの人が答えたことであろう。しかし, 子どもが木枯らしに吹き曝されているような現代では, 「子を満身に愛せる親がどれほどいるのだろうか?」, という答えが返ってくるような気がする。21世紀は子どもの世紀になれるのだろうか?

2. 20世紀からのメッセージ

筆者は昭和54年4月に高知医科大学小児科学教室へ赴任してきた。当時, 日本小児科学会高知地方会会長は尾木文之助先生(故人)であった。尾木先生の仕事ぶりは, 凄まじいの一言につきた。公務だけでも現在の筆者よりも多忙であられたのではないだろうかと思う。

その尾木先生が残された随筆, 子育て指導を先生の一週忌にあわせて, 1995年3月に奥様が自費出版なさった本が「育むところとからだ」である。その本の最初に, 「97点」という小文が掲載されている。それは, 子どもが勉強を頑張って97点の答案用紙を持って帰宅した。答案用紙をみた母親の第一声は「ほらみなさい。お母さんがびっしり言いゆうろうがね。できたと思うても, もう一度み直さんといかんいうて。これがなかったら100点じゃった。あほうやねえ」, という文章で始まる。子どもは滅多にとれない良い点を取ったので, お母さんに誉めてもらえると思い, 意気揚々として帰ってきたのである。しかるに, 母親の第一声は良い点に対する賞賛ではなく, たった一問間違えたことに

対する叱責であった。母親は内心「良く頑張った」と誉めたかったのであろうが, 更に頑張ったいと欲する親心で, ついつい叱咤激励してしまったのである。おかげで息子はやる気を無くしてしまった。

尾木先生がここで言いたかったのは, 第一に「誉めてやることの大切さ」, そして「100点主義の危うさ」, である。何事も, わずかな欠点や失敗を伴っているのが良いということである。完璧を期すると無理が生じて, 大失敗の元になり, 心根が歪み, 将来大爆発の根源にもなるということである。3点足りないことの重要性は「弓の弦」や「ハンドルの遊び」のようなものであろうか。

誉めることと, 97点で満足するということの大切さは, 誰もが分かっているようで, 実は分かっている人は稀である。医局員に対して, 学生に対して, そして我が子に対しても(は特に, というべきか), ついつい100点を求めている自分に苦笑する。誉めるということは, 相手の能力に限界を感じている場合には素直に出来ることのように見える。期待している相手には「これでもか, これでもか」, と更に上を求めてしまうのが凡人である。それが子どもを不幸にしていると知っていてもである。「誉めることと97点主義は子育ての極意」であり, 将に21世紀への提言と感じる次第であるが, 尾木先生はご自分のお子さんに対してはどうだったのでしょうか。機会があれば息子さんに伺ってみたいと思うこの頃である。

3. 学校教育の荒唐

高知県では毎年4月に地元の新聞社主催で「赤ちゃん会」が開催されている。今年が73回

という長い歴史を持つが、悪く言えば、「赤ちゃん品評会」である。しかし、赤ちゃんのいる家庭では若い両親はもとより、祖父母も一家をあげて楽しみにしているという一大イベントである。高知県全域から2,000人以上の参加者があり、中にはわざわざ県外から帰って来て参加する夫婦もいる。筆者は高知医大に着任して以来、1～2回欠席した以外はずっと審査に参加してきた。その中で最近気づいたことは、乳児の発達が早くなっているということである。小児科学の教科書を見ると、定頭4か月、独座7～8か月、つかまり立ち9～10か月、一人立ち12か月、歩行14か月となっているが、最近の赤ちゃんはそれぞれ1～2か月以上早くなっているようである。一度、過去70年間におけるマイルストーンの推移を検討しようと考えているところである。

ここで問題にしたいのは、運動発達が早まっているにしても、人間の知能がそれほど進化している訳ではないということである。それにも関わらず、義務教育における詰め込み量の多さはどうであろうか。筆者が小学校で掛け算を習ったのは3年生か4年生のことであったと記憶している。しかるに、現行の教育課程では2年生で掛け算を教えている。九九も満身に覚えていない子が、二桁のかけ算をやっている。ついていけない子が増加しているのも、高校生で分数が出来ない子がごろごろしているという話も、むべなるかなと思う次第である。

文部科学省が失敗したという「ゆとり教育」は、本当のゆとり教育とは言い難いもので、週休2日制で学校で教える時間が短くなり、子どもたちが自由に使える時間が増えたただけのことではないだろうか。あるいは教師の情熱を冷ましたりも知れない。このような見せかけのゆとり教育では、子どもの学力が低下したのも当然の結果であろう。これからは学力低下を防ぐために、教育内容を増やすことになるという。今後、これまで以上の内容を同じ時間で教える極端な詰め込み教育にすることであろうか。しかし、現在の学力低下は教育内容を減らした結果ではなく、教えられた内容を理解できないまま進級している子どもたちが増加していることによることを忘れてはならない。

益々授業内容が理解できなくなり、ついていけない子どもたちを増やし、そして不登校予備軍や高校中退者をこれまで以上に増やそうとしているとしか感じられない。文部科学省の意図が理解できないのは筆者だけであろうか。

そもそも、教育は基礎に時間をかけて、繰り返し繰り返し、まさに九九が反射的にできるように、じっくりと時間をかけて、基礎固めから開始しなければならぬはずである。多くのことを教えるのは、その後にするべきである。基礎がしっかり出来あがってこそ、教育内容のスピードアップにもついて行けるのである。しかし、教育内容が複雑で多くなったのであれば、教育期間を延長するのが筋ではないだろうか。子どもたちの頭脳が進化しているわけではないのだから、同じ時間で教える量が増えれば、学力はさらに低下することであろう。それどころか、複雑かつストレスが多く、親子関係が希薄で母子愛着関係が形成されにくい今の社会では、勉強することに関する脳の発達は逆に障害されていると考えるべきであろう。

教育期間を延長するにしても、早期教育などは言語同断である。特に、母国語が完成する前に外国語を中途半端に教えると、母国語も外国語もまともに身に付かないで成長してしまう恐れがある。乳幼児期にテレビを見せ過ぎると、言語発達が遅れ自閉的になることが少なくないことと同じであろう。

4. 我慢することへの不公平感

早期教育、基礎が出来ないままの詰め込み教育だけでも、今の子どもたちは大変なストレスに曝されている。そして、過酷な中学受験、高校受験、そして大学受験である。しかも、戦後の混乱期からバブルという、日本文化の混沌とした時代に育った親が育てている子どもたちである。子どもや家庭を愛する暇があれば、仕事をするように教育されてきた親とその親である。「心よりも物質」、「人を出し抜いてでも得をする」、「努力しての上上がったものを自分のレベルに引き下げるのが公平である」、というような勘違いが横行する社会である。公平と公正の違いさえ理解できない社会で育てられている子どもたちである。心がゆがんで育つのも無理か

らぬところであろう。不登校, 心身症, 引きこもり, いじめ, 集団の少年による犯罪, そしてとどめは乳幼児虐待であろうか。耐えることも我慢することもできない時代になってしまった。

さらに, 夜間診療をする度に感じることもある。「休日・夜間診療は本当に必要なのだろうか」ということである。「必要とする人たちがこれほどたくさんいる時代に何を言う」と叱られるかもしれない。確かに, 夜間診療を必要としている人が数多く存在していることは事実である。そのことを否定するつもりはさらさらない。しかし, 夜間診療に携わったことのある小児科医であれば, ほとんどの人が筆者と同じ感想を持ったことが一度ならずあるのではないだろうか。夜間診療を受診している子どもたちの中で, 「夜間診療を受診するのはやむを得ない」と思う子どもは20%に満たない。逆に, 「どうして今まで来なかった」といいたい例も少なくない。保護者教育をおろそかにし, 真の救急患者をたらい回しにしてきた医療側が招いた結果でもある。しかし, 今の親はたった2〜3時間を待てない人が多い。それどころか, 昼間の診療の待ち時間さえ我慢できない人も少なくない。親が我慢しないのであるから, その背中をみて育つ子どもが我慢できるはずがない。嫌なことがあれば, 泣きわめいたり, すぐに切れる。エネルギーのない子は心身症になり, エネルギーのある子は行為障害に走る, というような図式が出来つつあるような気がする。

もちろん, 共稼ぎなどのために仕事を休めず,

夜間診療にかからざるを得ない人も少なくな。仕事を休むと会社を首になる心配のある人たちが, どれほど多いことかを行政は把握しているのだろうか。病気で苦しいときにまで保育所に預けられ, 「親から引き裂かれた」, それどころか「親に捨てられた」と感じる子ども達のことを考えて欲しい。被虐待児の将来をみる思いがする。夜間診療を充実させるくらいなら, 子どもが病気になった時くらい, 自由に会社を休めるような法律が作れないものであろうか。病児保育や病後保育のような虐待まがいの制度(筆者は「行政による虐待」と呼んでいる)がまかり通るようでは, 日本はさらに不幸な時代へと駆け足で進んで行くであろう。せめて, 企業内保育所を完備出来ないものであろうか。もっとも, 1時間以上かけて通勤する都会では, 子どもを1時間もラッシュの電車に乗せること自体が虐待行為であるが……。

5. おわりに

このままでは我が国の21世紀は子どもの世紀どころか, 20世紀以上に子どもを犠牲にする世紀になるであろう。少子化は更に進むであろう。政治家が, 教師が, 医師が, マスコミが, そして社会全体が子育て支援をもっと地道で, もっと温かく愛のあるものにしなければ, 数十年後の日本は国家存亡の危機に曝されるであろう。こと子育てに関しては, 大家族制度や長屋生活の時代の方が優れていると思う。我が国の21世紀を子どもの世紀とするには, 今がぎりぎりラストチャンスである。